下関市立大学広報

SHIDAI

magazine 51

★公立大学法人設立記念特集号

★産業文化研究所唐戸市場調査

★私の研究紹介

★新学長からのメッセージ

★50周年記念式典開催

★新体育館完成!!

2007就職活動レポート

大学で何を学ぶのか?

私の「出会い」

2007年4月1日　第51号

発　行

下関市立大学広報委員会

山口県下関市大学町2-1-1

TEL 0832 (52) 0288

FAX 0832 (52) 8099

http://www.shimonoseki-cu.ac.jp/

新学長からのメッセージ

―下関市立大学は、平成19年4月1日に公立大学法人として新しく生まれ変わりました。本日は、下関市立大学の坂本紘二学長にこれからの下関市立大学についてお尋ねしたいと思います。坂本学長、よろしくお願いします。

（坂本学長）

こちらこそよろしくお願いします。

―まず、開学50周年を迎えた下関市立大学が、公立大学法人となった理由を教えていただけますか？

（坂本学長）

今、本学を含め、大学という高等教育機関を取巻く環境は大きく変化しています。急激な少子化の進行と国の規制緩和による大学定員の増加により、いわゆる大学全入時代というものが到来しています。大学間の競争も激しくなり、国公立大学を含めて、大学の質が問われる時代に入ったといえるでしょう。今回の公立大学法人化は、こうした時代に、人々のニーズの変化を適確に捉え、迅速かつ柔軟に対応するために、体制を整えようとするものです。

―学生にとってはどのようなメリットがあるのですか？

（坂本学長）

法人化すると中期計画を策定し、その計画に基づいて、教育の向上や学生のみなさんへの支援に計画的に取り組むようにしていきますので、学生へのサービスがこれまで以上に向上することが期待できます。また、大学自身の裁量権が大幅に拡大するため、学生の皆さんからの要望や問題点の指摘に対しても、柔軟かつ迅速に対応できるようになります。

―下関市立大学は、昨年度、開学50周年を迎えましたが、法人化した下関市立大学は、これからどのように変わっていくのでしょうか？

（坂本学長）

これまでは、本学では大学側の考え方が行政側に必ずしも十分に伝わってこなかったのではないかな、という想いがあります。行政側からもそう感じているでしょう。法人化により、大学の自主裁量権が拡大されるとはいっても、公立大学法人である以上、地域や自治体と風通しの良い信頼関係を築いていくことは重要なファクターでしょう。だから、これからはもっと相互に意思疎通を図っていこうと思っています。そして、本学の基本理念である『地域に根ざし、世界を目指す』教育を実現し、その内容を一層充実させるために、コミュニケーション能力の向上を教育の基本に据えながら、『共創による大学づくり』をめざしたいと考えています。

―『共創』とはどのような意味ですか？

（坂本学長）

共にある関係の場づくりの中で協調して価値を創り出すという意味です。角突き合って競い合い、出し抜くことや蹴落とすことを目論む「競争」から脱して、パートナーシップを発揮し合い、互いに補い合う協働・連携を強め、意義あることを互いに創出しよう、共通の目標を達成しようということです。そのような『共創』の取組みを、大学の営みのあらゆる場面で、積極的・実践的に進めながら、明るい開放的な大学をめざしたいと考えています。

―本学の学生にとっても、より魅力的な大学に生まれ変わるということですね？

（坂本学長）

本学の学生や教職員を含めて、大学を構成するあらゆるスタッフの参画意識、かかわり合う意識の醸成があってこそ、また、学外の諸組織や団体との交流を通しての協働の取組みが実を結んでこそ、大学は活性化してきます。学生たちが市民とも触れ合って活き活き励んでいる大学こそ元気な大学です。そのようなプロセスを通して地域に根ざした大学の個性が発揮されていくのです。法人化という変革の機会を逃さず、失敗は次のステップへの飛躍と捉えて、改善と改革を不断に志向し、より良い方向を求め続けることによって、本学の素晴らしい伝統は維持されていくのだと思っています。

―法人発足直後のお忙しい時期に時間を割いていただき、ありがとうございました。

（坂本学長）

こちらこそ、ありがとうございました。

下関市立大学体育館完成

老朽化した体育館を解体して新たに建設中であった下関市立大学体育館が平成19年３月８日に完成した。

新しい体育館は、鉄筋コンクリート一部鉄骨造、延床面積3,278㎡で、メインアリーナを主にトレーニングエリア、多目的室等のエリアがあり、西日本有数のスケールを誇っている。

メインアリーナは日常的なスポーツ活動を主体とすると同時に、国体等の大規模競技大会にも十分対応できるように、使い勝手の良い可動客席が設けられている。採光面においても効果的に自然光を導入できるよう、体育館正面壁面にはカーテンウォール、天井にはトップライトが設けられ、自然光を取り入れた、明るく開放的な施設となっている。照明設備は、電動昇降装置付埋込ダウンライトと高効率、高演色1000Wメタルハライドランプを採用し公式競技が可能な1000LXの照度を得るとともに、照明制御装置により使用目的に合わせてグループ制御して省エネルギーを図っている。

なお、この新しい体育館は、平成23年（2011年）に開催される第66回国民体育大会（やまぐち国体）のなぎなた競技の会場となることが決定している（写真左：建物外観、写真右：メインアリーナ）。

唐戸市場アンケート調査実施

下関市立大学附属産業文化研究所では、2001年４月のオープン以来多くの市民や観光客で賑わう唐戸市場において、２月17日(土)、18日(日)、20日(火)の３日間、対面インタビュー形式によるアンケート調査を実施した。今回の調査は、唐戸市場を利用する消費者の特性を把握し、市場をより活性化させる対策を検討するためのものである。

なお、今回の調査では、本学の学生がボランティアとして積極的に参加し、重要な戦力となった。

附属産業文化研究所は、専任教員全員が研究所の所員を兼ねて、大学が立地している地域の産業や文化を調査し研究する機関であり、所員の共同研究を推進しながら、北九州市立大学附属都市政策研究所と共同で関門地域共同研究会を組織して関門地域の調査・研究を続けている。

また、国際交流協定校との国際共同研究もプロジェクト方式で進めており、地域づくりや町おこし等にも積極的に関わっている。今回の調査のように、附属産業文化研究所の調査活動には、学生の皆さんがボランティア調査員として加わっており、貴重な体験をつむ機会になっている。

2007 就職活動レポート

下関市立大学では、小規模大学のメリットを生かし、教職員が一体となって、学生の就職活動を強力にバックアップしており、地方大学としては群を抜く就職実績を誇っている。本特集では、平成18年度の就職戦線を見事勝ち抜いた今春卒業の皆さんに、自らの就職活動をレポートしてもらった。

自分の可能性を信じて

永田　佳久（経済学科）
就職先：日本銀行

僕は、約半年間におよぶ就職活動を経て、自分の希望する就職先に内定することができた。その活動中に最も強く感じたことは、何らかの目標を持って学生生活を送ることの重要性である。学生の本業である学業はもちろん、その他にサークル活動、アルバイト、恋愛等何でも良いので、４年間の大学生活において、自分はこれだけ頑張ったのだと人に誇れるものを１つでも持っていることが大切であると感じた。

就職活動の際に、出身大学の名前だけで判断される時代は既に終ろうとしている。自分自身が大学生活において何をしてきた人間であるかを企業側にしっかりとアピールできるかどうかが何より重要な要素になってきているのである。

そして、それ以上に大切なことは、自分の可能性を自分で制限しないことである。心の底から自分の無限の可能性を信じることができたとき、必ず自分の思い通りの道が開けるはずである。１人でも多くの方が、充実した大学生活を送れることを願っている。

全てが自分次第である

本田　悦子（経済学科）
就職先：全日本空輸株式会社

「全てが自分次第である」これが高校との大きな違いです。自分の志次第で可能性は無限に広がります。初めから無理だと決め付け可能性を狭めてしまうのは本当にもったいないことです。私は入学当時「将来の夢」がはっきりと定まっていなかったのですが、いつか「本気でやりたいこと」に出会ったときに、その選択肢を選べない状況が一番もったいないと考え、公務員や資格、語学の勉強に取り組みました。積極的にチャレンジして努力した結果、方向転換することになってもきっと後悔はしないはずです。

私はこの大学で友人たちや先生方と出会い、遠回りしてでも多くのことを経験できたからこそ今の自分がいるのだと実感しています。皆さんの志ひとつで実りある忘れられない４年間になりますし、それを応援する環境は整っています。あとは皆さんの志次第です。

大学生活で何をするか

牟田　勉（経済学科）
就職先：アサヒビール株式会社

私が高校生の頃、大学を評価する「ものさし」は大手予備校の出している偏差値ランキングのみであった。ただ単純に、偏差値が高い＝良い大学と錯覚していたのだ。また就職においても、やはり大学の名前（偏差値）で決まるのだろうと考えていた。しかし実際に就職活動をしてみて、それは間違いであったと思う。もちろん勉強が出来るに越したことは無いが、私が運良く内定を得たメーカーをはじめ多くの会社が「人間性」を見ていると思う。私は就職活動中「～したいと思います」ではなく「～します」と言うように心がけた。まずは自分に自信を持つことが大切である。そのためには、大学生活で何をするかというのは非常に重要な要素となってくる。市大は、規模は小さいがその分教授や講師たちとの交流が深く、また就職サポートも充実している。地方の大学だが魅力は十分にあると思う。

自分の好きなもの

市橋　京子（国際商学科）
就職先：花王株式会社

大学生になり、化粧をするようになると、化粧品は女性に自信を持たせたり、次々と出る新商品を楽しみにさせたりと、女性の“わくわく”とした気持ちを作るものだと感じ、将来は化粧品に関わる仕事がしたいと考えるようになりました。

まず私が就職のためにしたことは、アルバイトです。化粧品業界のことを知るために、ドラッグストアで化粧品売場担当のスタッフとして働きました。本格的に就職活動が始まる３年生の秋頃までに、その売場で業界研究をし、化粧品流通について学び、その結果、４年生の春に花王の化粧品企画営業部門から内定をいただくことができました。

「自分の夢は何か」と考えると、はっきり出てこなくて悩む人もいると思います。しかし、日々の生活の中での「自分の好きなもの」を意識することで就職の道が思い浮かぶかもしれません。

下関市立大学創立50周年記念式典開催

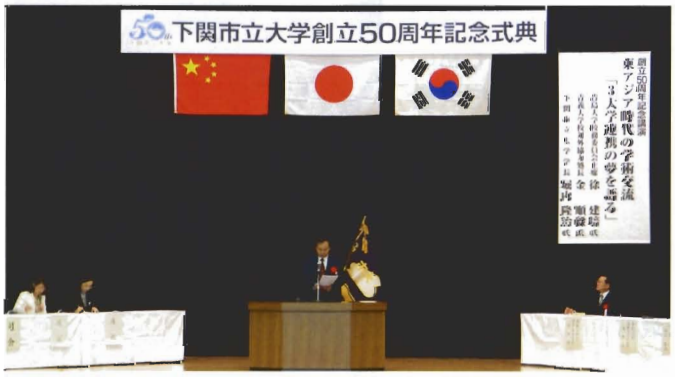
下関市立大学は、昭和31年４月に下関市立下関商業短期大学として開学以来、昨年で創立50周年という記念すべき年を迎えた。去る３月18日(日)には新しく完成した下関市立大学体育館において、本学の創立50周年を祝う記念式典が開催された。

前日17日(土)には学生主催による前夜祭が開催され、軽音楽演奏、よさこいダンス等の催しがあった。式典当日は、江島潔下関市長、関谷博下関市議会議長をはじめとする下関市議会議員、国際交流協定締結校である韓国東義大学校の金任植理事長をはじめとする国内外の学長等、本学の歴代学長、名誉教授、後援会、同窓会、関係団体および本学教職員等約300人が出席して挙行され、本学の創立50周年の節目を祝った。式典終了後は、同会場において、徐建培青島大学校務委員会主席、金順殷東義大学校対外協力処長および本学学長の三者が『東アジア時代の学術交流～３大学連携の夢を語る』という演題で記念講演を行った。

また、同日午後５時30分からシーモール下関４階ホールにおいて、式典参加者および同窓生が出席して、記念祝賀会が開催された。

前夜祭

記念式典(写真は江島潔下関市長)



記念講演会

記念祝賀会

私の研究紹介

下関市立大学　教授　櫻木　晋一

皆さんが今まで学んできた日本史と、大学教育における日本史の決定的な違いは、単なる暗記科目としての日本史ではないということです。大学の教員は必ず専門研究分野をもっており、自分の研究を織り込みながら担当している科目について、高度な内容を分かりやすく教えています。私の場合、もともと日本経済史が専門で、さらにそのなかでも貨幣史という分野を専門としています。この大学では、基礎演習・日本史・日本史概論・専門演習を担当していますので、皆さんがこれらの科目を履修されればお会いするチャンスがあります。

歴史研究のオーソドックスな方法は、残されている文献史料を読み解いて過去の事実を把握していくといったやり方ですが、私の場合は考古資料を用いて歴史を理解しようとする立場をとっています。この点ではちょっと変わった研究をやっていると感じられるかもしれませんし、伝統的ではない新しい研究スタンスをとっていると考えられるかもしれません。歴史研究をおこなうためには文献以外にもいろいろな史料が存在し、なかでも人間が残したモノ(=考古資料)は重要であるという認識です。遺跡の調査をしていると、しばしば貨幣が出土します。大半は江戸時代の寛永通宝などごくありふれた貨幣ですから、今まではあまり重要なものだとは認識されてこなかったのです。しかし、人間が生活していく上で、貨幣が重要な役割を果たしてきたことは言うまでもありません。貨幣は経済生活のなかでは血液のような存在です。これらの出土する貨幣を通して、日本の古代・中世・近世という時代の人間生活のあり方、つまり歴史を把握したいのです。皆さんはきれいな水溜りに貨幣が投げ入れられている光景を見たことがあると思います。この貨幣は人間のある願いが込められたものです。このような貨幣を研究することによって、貨幣は経済的な面だけではなく、精神的な側面を考察する材料にもなるのです。日本で貨幣はいつ頃から、どのような材料と技術で作られ、どのように使用されていたのかといったことについて、貨幣というモノ資料を観察しながら研究をしています。

昨年は国内だけでなく、ベトナム、韓国、イギリスにも調査で出かけました。丸くて中心に四角い穴のあいた貨幣は、刻まれている文字こそ違いますが、日本だけでなく中国・韓国・ベトナムなどの広い地域で流通していたのです。東アジアの前近代社会では、共通の通貨を使用していたと言っても良いかもしれません。歴史現象の共時性といったものがあるのです。ベトナムの調査では、皆さんご存知の寛永通宝という江戸時代の貨幣を確認できました。これは日本が鎖国をしていたにもかかわらず、一部の貨幣は流出していたことを示しています。韓国では、沈没船の底に積まれていた約800万枚という大量の貨幣の調査に出かけました。この有名な船は、1323年に中国の寧波から博多へ向かっていたものが新安沖で沈没したものです。皆さんは信じられないかもしれませんが、中世の日本では幕府が貨幣を鋳造しておらず、使用する貨幣をおもに中国から輸入していたのです。

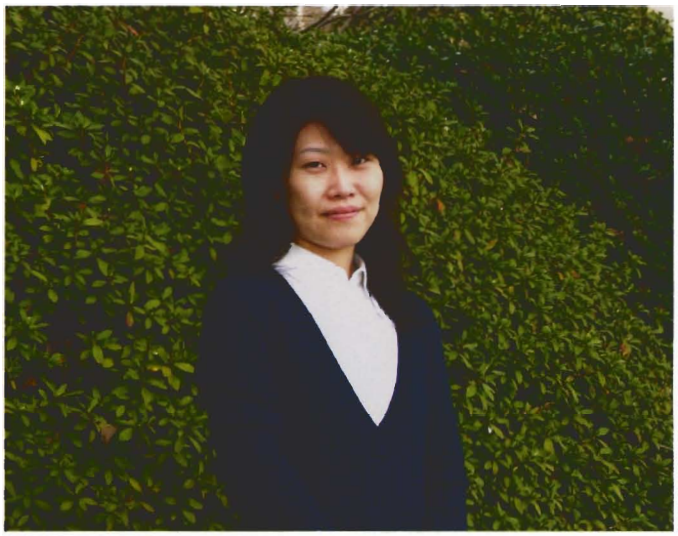
このような日本に入ってくる前の貨幣の実態を知ることで、日本の各地で使用されていた貨幣の流通メカニズムを理解できる可能性があると考えているのです。また、イギリスへも出かけ、大英博物館などで所蔵されている日本貨幣の調査をしています。これは古銭学という分野になりますが、趣味の世界ではなく、学問的な視点からきちんと貨幣を調べ、貨幣の歴史を解明しようとする立場です。分かっているようで分からないのが、貨幣の世界なのです。貨幣の歴史に興味がある人は、どうぞ私の研究室へお越しください（写真は、ベトナムハノイで調査した甕に入った大量の貨幣）。

2007年櫻木研究室トピックス

今年は、大英博物館所蔵日本貨幣コレクションのカタログ作りに参加する他、イギリス・韓国・ベトナムなどを研究のため訪問し、世界に貨幣史研究の成果を発信することになっている。ゼミ生には、貨幣史研究の最前線に触れる良い機会となるであろう。

私の「出会い」

下関市立大学　准教授　　森　邦恵



皆さんは、自分の人生を変える人、何かに出会っていますか？恐らく、「まだ」「わからない」という人が大半だと思います。私自身の体験をお話しましょう。

職業としての教員を意識したのは、小学5年生に読んだ一篇の小説でした。小さい頃から読書は好きでしたが、子供向けの小説は、作者の意図が子供心に見えてしまいあまり好きにはなれませんでした。ですから、図書館に行っても、伝記や図鑑などを一日中読んでいたのを覚えています。ところがあるとき、夏休みの宿題だったかと思いますが、小説の感想文を書かなければならないということで、自宅の書棚にあった有島武郎の全集を何気に手にとって読み始めました。それが「一房の葡萄」という短編小説です。ちなみに、その後、同じくこの小説を読んだ私の妹も現在は高校の国語教員になっています。なぜこの小説を読んで教員を意識したのか、よければ一読して確認してみてください（そして、私がこの小説に出てくる女の先生に少しでも近づいているのかどうか、も確認してもらえればありがたいのですが）。

さて、大学に入り教員への憧れは依然あったものの、採用までの遠い道程を思うと真剣に目指す意欲もなかなか起こらず、中途半端に将来を考える日々が続いていました。大学3年生になり、公務員を目指す友達が勉強しているから、という理由だけで「ミクロ経済学」のテキストを読んでみることにしました。ミクロ経済学とは、近代経済学の基礎的な理論なのですが、冒頭にでてくる「消費者理論」の部分で「このとき財やサービスの品質は一定と仮定する」といった内容の記述をみたことがありました。

果たして、実際に市場で取引されている財やサービスの品質は一定でしょうか？自動車や果物、衣服という財の品質、宿泊施設のサービス内容はどれも同じでしょうか？「仮定」が現実を反映していない、と思いました。図書室で、他のミクロ経済学のテキストも読みましたが、品質に関する明快な説明をみつけられません。そして、経済学は役に立たない、と急激につまらなくなってしまったのです。しばらくは、義務的に勉強していましたが、どうしても納得がいかず、当時のゼミの先生に何気に雑談の中で尋ねてみました。すると、着任したばかりの若いゼミの先生は、私の疑問に答えるための研究をしていて、「テキストにはまだこの理論は載っていないけれど、研究者の間では知られつつある。そのうち、テキストにも載るようになると思うよ。」といい、その研究内容を詳しく教えてくれました。現在、改定を重ねたある「ミクロ経済学」のテキストには、先生の言葉通り「新しい消費者理論」の説明が加えられています。まさしく、「経済は生き物」という言葉の意味を、学問の視点から体験することができたわけです。

私にとっては、この出来事が研究者を目指すきっかけとなりました。それからというもの、教科書を見て勉強する、というだけでは物足りなくなっていました。教科書の記述の背景に、研究者たちのどのような議論があるのか、自分もその中に関わっていたいと強く思うようになり、研究者を目指すことに決めました。今、本学での私の授業担当は、「ミクロ経済学」、研究テーマは「新しい消費者理論」である「財・サービスの品質」分析です。

もちろん、これだけの出会いだけではありません。今になって、本当に周囲の環境に恵まれていたことを実感します。私が、下関市立大学に教員として存在している、ということがこのようなあらゆる出会いに導かれた結果なのかもしれません。そして、思うのです。あの時、「一房の葡萄」を読まなかったら、あの時、ゼミの先生に思い切って疑問をぶつけていなかったら、と。

皆さんは、そういう人、何かに出会っていますか？そして、出会っていることに気がついていますか？

学務グループからのお知らせ

●学内(部室内も含む。)は所定の喫煙場所を除き、禁煙です。歩行中の喫煙や吸殻のポイ捨てはやめましょう。

●一気飲みは、大変危険な行為です。最悪の場合には死に至りますので絶対に行わないでください。

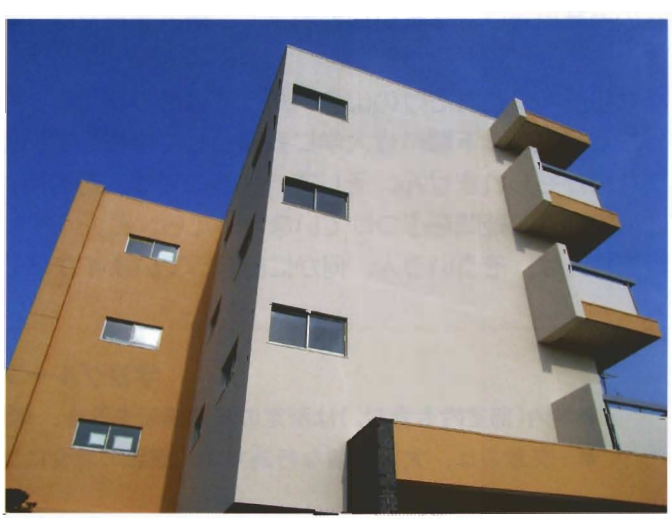
大学で何を学ぶのか？

下関市立大学　教授　横山博司

大学で学ぶというのはどういうことでしょう。高校や専門学校での学習とどう違うのでしょう。

大学の勉強は、社会に出ても役に立たないということがよく言われます。実際、大学の中には専門学校と提携して、資格講座を設けたり、あるいは学生たちの中には、就職のために専門学校に通っている人もいます。私がいちばん大きな違いと考えるのは、学んだ知識を基礎にして、様々な未知の問題を解決したり、自分の考えを訴えていく発信型の学習か、試験の問題を解くために暗記したり所与の技術を身につける受信型の学習かの違いではないかと考えます。全てではありませんが、高校や専門学校の学習の中心は、与えられた教材をこなしていくことに中心があります。受験のため、資格獲得のためといった具体的な目的があり、一定の答えがあります。例えば、最近、受験において、数学が暗記科目といわれているようですね。問題を解くためのノウハウを身に着け、この問題が出れば、どのようなパターンで解けばよいかを覚えるようです。でもそれでは既知の問題は解けても、未知の問題を解くことはできません。もちろん大学の勉強だって様々です。受信型の勉強もあります。下関市立大学は経済学部の単科大学です。初めは経済学を理解するための様々な基礎知識を学んでいきます。ここまでは明らかに受信型の勉強でしょう。しかし、大学ではそこでは終わりません。様々な経済学の知識をもとにして、いかにして、経済現象を捉えていくのか、その方法論を学び、自分なりの考え方を作り上げていくわけです。言い換えるならば、大学は、単に知識を吸収するだけの場所ではなく、いかにして問題を解決していくのかその方法論を学ぶ場所だといえるでしょう。それが、私の言う発信型の学習です。それゆえ、大学で学んだことは、目前にある対処の仕方が解っている問題にはすぐに役に立たないかも知れません。しかし、発信型の学習をすることで、未知の問題、多様な問題へ対処する力をつけることができるわけです。それが大学で学ぶメリットだと言えるでしょう。発信型の学習を行っておけば、試験の問題を解く能力や所与の技術はすぐ身につくと、大学では考えているのです。下関市立大学では、経済学を通して、そのような問題解決の方法を学ぶことができるわけです。

私の専門は心理学です。ストレスや不安がどの様にして発生するのか、あるいはそれに対処するための方法について研究しています。そこには、既存の知識では説明できない問題が多々あるわけです。実験や調査を行い、既存の知識を参考にしながら、そのメカニズムを説明し、理論を組み立てようと試みています。さらに、最近では、経済学、社会学、福祉学等の教員とチームを組んで「老人介護」に関する共同研究を始めています。そこには、心理学的アプローチだけでは対応できない様々な問題があるからです。もうお分かりですね。これが私の言う発信型の学習です。でも、それでもやはり、経済学部なのに心理学の講義があるのか、不思議に思う人もいるかもしれませんね。疑問を持った方は、私の述べた発信型の学習ということをもう一度考えてみてください。それでも、よくわからない人は、下関市立大学で学んでみませんか。疑問を感じたとき、あなたは大学で学ぶ資格が充分あるといえるでしょう。

ＳＣＵ国際交流会館開館

平成19年４月１日、市内宝町に「ＳＣＵ国際交流会館」が開館した。同施設は、鉄筋コンクリート造り４階建ての建物で、中国青島大学、オーストラリアグリフィス大学、アメリカ合衆国ロスメダノスカレッジ等の国際交流協定校からの交換留学生や、中国青島大学派遣研究教員などが居住する。館内には、談話ホールや娯楽室等の設備もあり、留学生と地域住民との交流会等の行事も今後企画される予定である。本施設の開館で、本学の国際交流事業の一層の充実が期待されている。